千代田遺跡の発見と四街道の歴史

1.郷土史の先覚者たち

千代田遺跡の発掘報告書には、八幡一郎氏が遺跡の意義を述べており、その中では「千代田遺跡が印旛沼に近く、印旛沼に注ぐ鹿島川がつくる浸蝕谷に沿う台上にあることは、少なくとも縄文時代の当時一種の海域であった印旛沼に続いて台下の谷には海水の影響が及んだとみてよい」と記されています。

その根拠は貝塚から発見された貝の種類であったのです。つまり、縄文時代には千代田遺跡の谷のすぐ近くにまで海が入り込んでいたと考えていたのです。貝塚の発掘で出土した貝の種類がハマグリやシオフキなどの海のものばかりだったので、そう考えたのも無理のないことでした。

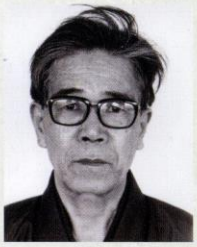


写真5
栗原東洋氏
(1917～1981)

しかし、この八幡氏の指摘に対して、四街道町の文化財審議委員をしていた栗原東洋氏が意義を唱えました。栗原氏は印旛沼の干拓史などの研究をしていたこともあり、印旛沼は当時すでに海ではなくなっていたと考え、そうした質問を手紙にして八幡氏に送りました。八幡氏からの返信は他の遺跡の調査の成果をまってから良く考えるという内容のものでした。

また、四街道の遺跡や遺物を研究した人に相川日出男氏がいます。相川氏は四街道小学校の教員をしながら、地域の考古学の研究を続けた人でした。相川氏は千代田遺跡が発見されるよりずっと以前に2か所の貝塚を発掘していました。その内の1つが前広台貝塚（みそら団地内）です。教え子が見つけたというその貝塚は鹿島川に面した台地の斜面に残されていました。小学生たちと共に発掘をした結果、そこから発見されたのは、千代田遺跡とおなじ縄文時代後期の土器（図4）とハマグリやオキアサリなどを主体とした海の貝でした。さらに、より内陸の場所で発見された和良比向井貝塚という中期（約4,500年前）の貝塚も海の貝を主体としていたと報告しています。

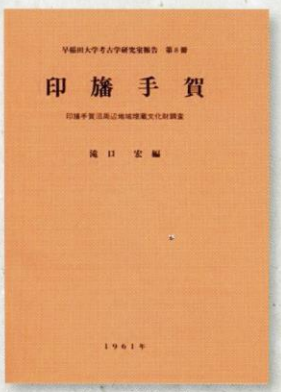


写真6『印旛手賀』

写真7
相川日出雄氏
(1917～1991)

また、その後に和良比向井貝塚と谷を隔てた対岸からは縄文時代前期（約6,000年前）の集落跡が発見されましたが、この集落の1軒の竪穴住居跡から小さな貝塚が見つかりました。貝はハイガイとカキを主体とした海の貝から構成されていました。

これらの発見は、遠い縄文時代の前期の頃から、東京湾から海の貝が運びこまれるルートがあったことを示しています。

2.浮かび上がる八木原貝塚の重要性

これまでに市内で発見された内陸の貝塚の中で千代田遺跡はもっとも内陸に存在しており、その規模も一番大きいのです。この大きな貝塚がいったいどのようにして残されたのか、その背景には、きっとまだ明らかにされていない縄文時代の地域社会の特徴が関係しているに違いありません。

そのことを調べるには貝塚の発掘調査が必要なのです。

しかし、千代田遺跡はその大半が団地の造成で消滅しており、八木原貝塚とその周辺部が公園として残されているのみです。

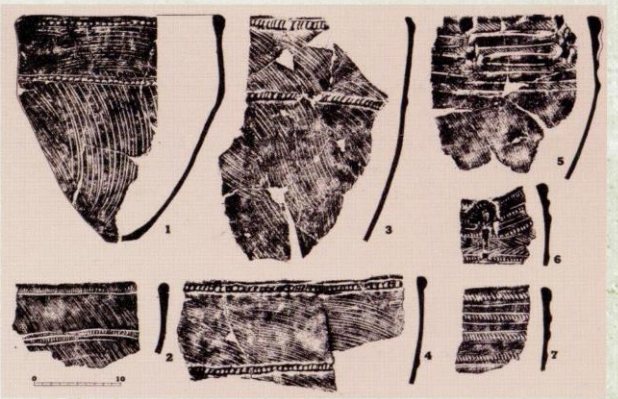


図4　前広台貝塚出土土器（『印旛.手賀沼』より）

八木原貝塚を発掘する

写真8　ボーリング調査の状況

1.団地の中に残された小さな遺跡

今は、千代田団地内の公園の一角にひっそりと残された八木原貝塚は、実は昭和24年（1949）に発見された焙烙台貝塚の一部だったのです。この貝塚は、四街道市の中では初期の頃に発見された遺跡の1つです。

また、遺跡が発掘された昭和45年（1970）代は高度経済成長の中、大規模開発という名のもとに日本列島が大々的に開発され、多くの遺跡が壊されてしまった時代でした。千代田遺跡も、山野を切り開いて造成工事が進められましたが、その造成の最中に発見された八木原貝塚は、当時の文化財審議会や地元研究者の方々の努力で、緑地公園として未来に残す努力がはらわれたのです。

現在も、団地の中にひっそりと残る八木原貝塚は、このように地域の歴史を語り継いだ人々の努力によって守られたことを忘れてはなりません。

2.八木原貝塚を掘る

明治大学考古学研究室では平成11年（1999）から印旛沼南岸地域における縄文時代後・晩期の研究を進めてきました。この地域には継続期間の長い大規模な遺跡が多く集中していることが戦前から知られており、遺跡と遺跡がどのように関係して1つの地域社会をつくっていたのかということを、実際に遺跡の発掘を通して研究するというものです。

この研究の中で、当時の人々が海の資源をどのように運び込んで利用したのかという研究課題が生まれ、八木原貝塚が再び注目されました。

この課題を具体的に研究するためには、実際に貝塚を発掘する必要性が出てきたのです。調査はまず、貝塚の正確な位置を調べることから始めました。その結果、貝塚は公園の緩やかな斜面に沿って細長く残されたものであることがわかってきました（図5）。

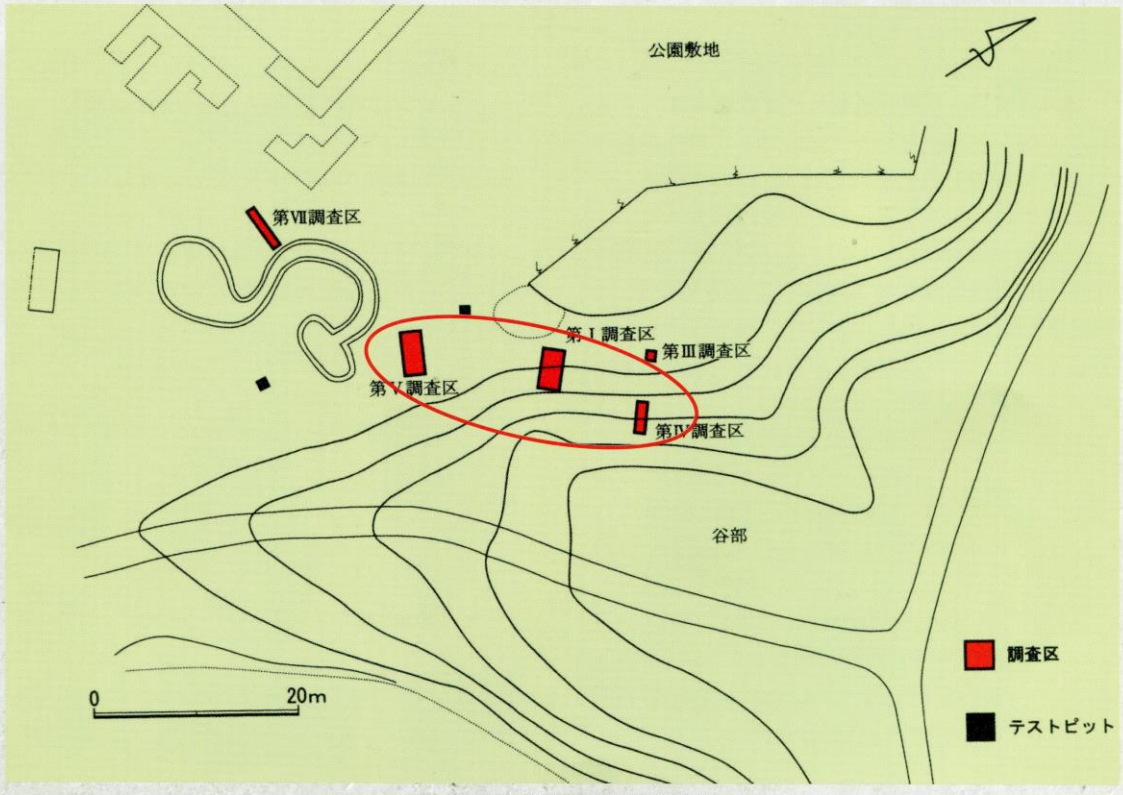
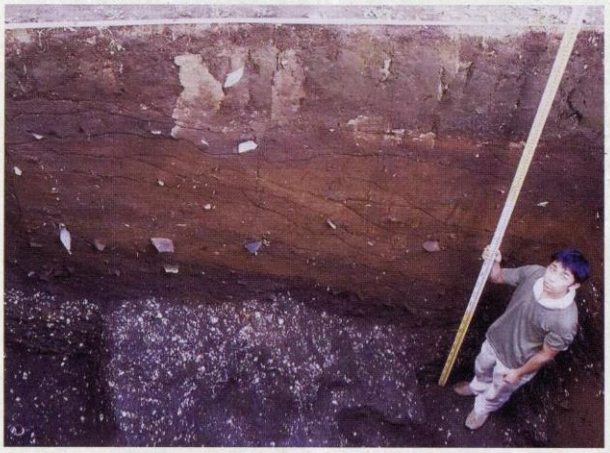


図5　八木原海塚の貝層分布範囲（推定）

A　調査が始まった第Ⅴ調査区

B　貝層から見つかった土器



C　厚い堆積層の下から発見された貝塚

D　内陸に流通した海の貝

写真9　八木原貝塚の調査状況

3.進む発掘

発掘はまず7か所の試し掘りをおこない、そのうちの5か所について規模を広げて調査を行いました。発掘をすすめてゆくと、縄文時代の地形は今の公園の地形とは大分異なり、現在の地表に見える緩やかな谷は、より幅が広く深いものであること、そしてこの谷を埋めるように土器や石器などを含む厚い土層や貝層が堆積している状況がわかってきました。とくに厚い地層の部分はⅤ区と呼んだ調査区であり、ここでは、現在の地表面から2.5mほどの深い部分が谷の底面であることがわかりました。現在の地表からではわからないくらい深い部分にもっと貝層が広がっている可能性が高いと考えられます。堆積した厚い土層の中からは、一番下で堀之内1式土器を含み、その上に加曽利B式、安行1～2式、安行3a～3b式期といったように、下の層から上の層に向かい順序正しく土器が出土しました。この事実は、八木原貝塚の周辺では長い時間にわたり人々が生活を続けたことを示す重要な証拠となります。

貝塚からは貝殻だけでなく、シカやイノシシなどの動物の骨、さらに小さな魚の骨やウロコなど、実に様々な食べ物の残り物が出土しました。魚の中には数ミリほどの小さな骨もあるので、発掘の時には土や貝殻ごと採取した後で1mmほどの目の細かいフルイで土を洗い、見つけ出すのです。貝はハマグリやアサリ、シオフキ、オキアサリ、カガミカイ、キサゴなどの海の貝が圧倒的に多く、満潮時に潮の影響がおよぶ印旛沼などに棲息したヤマトシジミなどは、むしろきわめて少ない状況が確認できました。このような貝の種類から成る貝層の厚い部分では1m以上も堆積していました。

さらに、樋泉岳二（といずみたけじ）氏の分析によれば魚もウナギやコイなどとともに、アジやマイワシ、サヨリ、ニシンなどの海に棲む魚の骨が見つかっています。これらはどれも当時の印旛沼では採れない魚です。こうした事実から、八木原貝塚は貝だけではなく魚までを東京湾側から持ち込んでいたらしいことがわかってきました。

未来の千代田遺跡・八木原貝塚

1. 発見が歴史を変える

過去の歴史を文字資料だけに頼らず、様々な証拠を使って明らかにするのが考古学という学問です。文字に記録されていればすぐにわかる事も、遺跡や出土品を丹念に調べ上げることによって、そこに数千年も昔の文字の無い時代の人々の歴史を生き生きと描くことができます。そして、研究の進歩によって、考古学は常に新しい事実を明らかにすることができるのです。八木原貝塚もこうした研究の舞台の中で、だんだんとその実態が明らかにされてくるでしょう。

昭和58年（1983）4月15日に四街道市の指定史跡になった八木原貝塚には、昭和63年（1988）3月に遺跡の一隅に解説板が設置されました。その一文にはこうあります。

「八木原貝塚はこの千代田近隣公園の中に現状保存されている。この貝塚は現在内陸部に位置するが、かつては、はるかに遠い太平洋側利根川をさかのぼり、印旛沼を通じて海水が貝塚にさして遠くない所まで浸入してきたと考えられる。昭和46年に千代田団地の造成に伴い発掘調査を行った結果縄文時代の前期から晩期までの土器が出土し、もっとも多かったのは後期（3,000 ～ 4,000年前）の土器である。祭祀関係の土偶（どぐう）や土版（どばん）、打製石斧（だせいせきふ）などの石器も多く、貝類はハマグリ、ヤマトシジミ、アサリなど28種に達する。」

その当時はまだ印旛沼側から海の貝が持ち込まれたと考えられていました。この理解は現在では異なっており、印旛沼はすでに汽水（きすい）化して海ではなかったことや、既に述べたように、多くの魚介類は東京湾側から持ち込まれたものであることがわかってきたのです。研究の積み重ねによって理解が変わるのが科学としての歴史なのです。その意味ではこれまでの見解も貴重な財産となるし、あらたに設置された新しい解説板の説明がさらに変わることもあるのです。次々に新しい理解や発見が積み重なってやがて本当の歴史がわかるようになるのです。

2. 文化資源としての八木原貝塚

平成23年（2011）は四街道町が四街道市になり、30年の節目の年でした。そこで市制施行30周年記念事業としての歴史講演会や市内の重要な文化財や出土品を展示した展示会が開催されました（写真10）。

歴史講演会では「千代田遺跡がひらく縄文の世界～千代田団地に眠る巨大な縄文の大集落～」と題した講演が行われ、市民の方々に千代田遺跡や八木原貝塚での新しい発見が報告されました。

今は、千葉県の内陸部というイメージが強い四街道市も、3,500年前は東京湾からの様々な物資が持ち込まれた地域であったのです。

八木原貝塚の研究は現在も続いています。その中でまた新しい発見もあるでしょう。今回の研究成果のなかで一番の大きな発見は、千代田遺跡は、周辺の地域と密接な関係を結んで成り立っていた、ということです。千代田遺跡の実態を明らかにするためには、四街道という場所を超えて、様々な地域や学問分野の人たちとの協力が必要になります。さらにこれからは、これまでに明らかにされたことを市民が地域の歴史を考える材料として用い、八木原貝塚の縄文時代を入り口として人類の歴史を考え、私たちの未来を考える糧とすべきでしょう。実際の遺跡に立って、本当の歴史を考えることによって、そこからきっと新しい四街道の未来が見えてくるに違いありません。

八木原貝塚は、現在も実在する四街道の歴史のよりどころとしての重要な意味を秘めているのです。

写真10　展示会（市制施行30周年記念事業「四街道の歴史展」2011.9.23～10.1）

主な縄文時代後・晩期の遺跡

【四街道市の文化財】普及版 No.5

八木原貝塚と縄文社会

発行日 ✣ 平成24年3月
著者 ✣ 明治大学文学部 阿部芳郎
発行 ✣ 四街道市教育委員会
制作 ✣ 株式会社エリート情報社 印刷出版局